

自由な人間に育てる



ジョン・ホルト

筆者のジョン・ホルトは大学で工業経営を専攻し、その後三年間の海軍兵役を勤めた。除隊後六年間、世界連邦運動の仕事にかかわった経歴を持つ。その後始めたばかりの小さな学校に出くわし、好きになり、教えはじめた。公式的な教育法を学んだことはない。何冊かの著書があり、以下は最近の著書『The under-achieving School』（Piman Publishing Corp.）からとったものである。

1 教えるということ

勿論すべての学校が似ているわけではない。私の知っているいくつかの学校はよい学校である。あまりよくないと思われるいくつかの学校のうちでも、比較的よいものもあり、多くはよくなりつつある。その上、私は多くの学校関係者、教師、経営者など、さまざまな段階の人びとと会って話したが、かれらのうちの多くは、今のままの学校に満足しておらず、方法さえわかれば、勇気さえあれば子供にとつてもっと、もっと快い場所になりたいと思っている。

それにもかかわらず、ほとんどの学校が今までそうであったような、子供にとつてはいやな場所であり、同様に、誰でもそこにおり、生活し、学ぶ者にとつては、いやな所そのままである。第一に学校にはいまだに残酷さが多い。とある心理学教授が最近話してくれたことがある。彼の大学からは教育実習に近くの中都市に行っている。ある女子学生がはじめて行くと、その校長が彼女に一本の棒を渡して言った。「君が何を奴らに教えるかどうか私の知ったことではない。ただ奴らを

静かにさせておきなさい。」

いうまでもなく、その子供たちは貧乏であつた。普通、金持ちの親たちはそんなことには我慢できない。こんな程度のこととは特別ではなく普通のことである。先の教授の何人もの教え子たちが、子供に、教育に期待、理想を持って教育実習に行つて泣いて帰つて来て言った。「子供をぶちたくない」。しかし、あまりにも多くの学校で、いまだにこれは空念仏に終つている。

しかし、子供に暴力を行使することを是とする者はこちこちの右翼の外には少ないからその点に関して攻撃してもはじまらない。とにかく、子供たちはしばしば暴力に対抗することができる。それは少なくとも直接的で、明白な場合である。誰かが棒でぶつとか、授業中にわざと阿呆にしたてられるとかすると、何がされたか、誰がしたのかすぐわかる。誰が敵かすぐわかる。しかし学校で子供たちになされる害悪に対して、子供たちは抵抗することができない。何がなされたか、誰がしたかわからないからである。たとえ知つたとしても、子供たちはそれが親切なおとなたちか、かれらのためにやってくれることだと思

つてしまふ。

ほとんどすべての子供は、学校の建物に一歩足を踏み入れる最初の日には、学校生活で、またその後の生活において——余程異例か、幸運でない限り——とうてい再びは成れないほどに鋭利で、好奇心に満ち、知らないことに恐れをなさず、物事の発見、判断に速く、資質に豊かで、自信に満ち、我慢強く、独立心旺盛である。

すでに子供たちは、世界とかれらのまわりの人びとに深い注意と関心を払い、学校タイプの公式教育によらずに、学校でやらせられること、先生がやってきたことよりはるかにむづかしく、複雑で抽象的な課題を果たしてきた。

子供たちは、ことばの神秘を解いてきた。ことばを発見——そもそも赤ん坊のころは、ことばがあると知らなかった——したし、どんなふうにも働くかを知つて、使うことを覚えた。子供は実際それをしとげたのである。つづいたり、試したり、自分専用の文法をあみ出した。それが使えるか試してみたり、ついには通じるように徐々に変え、洗練していった。

一方でこうしたことをしながら、たくさん

の他のことも同様に習うのである。学校でしか教えられないと自負している「観念」や、学校で教えようとすることよりもっと複雑なことも習い覚えてしまうのである。

さて、この好奇心に満ちた、我慢強い、決断力ある、力に満ちた、巧みな学習者は学校にやってくる。彼を机の前に座らせて、何を教えようというのか。色々である。まず手はじめに、学ぶことは生活することとは別だということ。「学校へは勉強しに来るんだ」と我われは言う。まるで以前は勉強したことがないみたい、まるで生活するのは外で、勉強するのがこの中であるみたいに、二つの世界はまるで関連ないみたい。

そして第二番目に、子供はひとりでは何もできず下手くそであるということ教える。読み方、その他何ごとであれ、子供がすでに習得したことよりずっと簡単なことでも、我われはこう言う。「読めと言われたい限り読まないことだ。教える通りに読まないなら、お前は読めないのだ。」つまり、勉強は受身なものであり、自分のために自分がやる何かでなく、誰かが自分に対してする何かであるこ

とを悟るようになる。

その他さまざまな方法で子供は自分が無価値であること、信ずるに値しないものであること、他人の命令を聞くことだけができ、その上に他人が何かを書く白紙である、ということ教えられる。子供の尊重だとか、個性の尊重だ、なんだと、よくがなりたてるものだ。

しかし、我々のすることは言うところのこととは反対に、子供にこう言っているのと同じことである。「おまえたちの経験、関心、好奇心、必要、知っていること、欲すること、好き嫌い、得手不得手、こんなものは全然大事なことではありやしない。ここで重要なのは、我われの知っていること、我われの大切と思うこと、おまえたちにやれというところのことだ。その通りに考えて、そうなりなさい。子供はすぐに質問しなくなる——好奇心を満足させてくれるために先生はそこにいるのではないことを知るようになる。

その他に子供は多くのことを努力してみにつける。まちがえること、不確かなこと、混乱していることは罪であるということを知る。正しい答えこそ学校の要求するものなのだ。そこで子供は、正しい答えを先生から聞き出

そうと苦心したり、知らないことを知っているように思わせるために、さまざまな手練手管を覚えこむ。言いわけ、はったり、誤魔化し、欺瞞を習う。なまけることを習う。学校にあがる前、子供は何時間でもぶっつけに何かやりつづけたものだった。ひとり、何のお返しもあてにせず、世界を意味あるものにする。そしてその中で生きる資格をものにする作業に熱中したものだった。学校の子供は、二等兵か徴用労働者のように、ずるけること、いかにボスの見ていない所で、仕事しないか、見ていることをいかに知るか、

森の奥で

(8才の自由学校に行っている子供)

ある日森の中を歩いていたら
ちようちようが舞いおりてきて
私にいった

「花はどこにあるの？」

私はいった

「野原には花がいっぱい

地面にもいっぱい花があるわ
ちようちようがいった

「私はめくらなの

私を花の上のせてくれる？
私はそうしてやった

見ているのを知っているとき、いかに仕事をしているように見せかけるか、など十分に勉強する。

子供は、実際の生活では買収、おどかし、なだめすかし、などされない限り何もしないことを習う。何事もそれそのものためにする価値などはないが、もしあるとすれば学校ではできないということを知るようになる。たいくつすること、精神の一部分だけを使うこと、周囲の現実から白日夢や空想に逃避することを覚える。その空想にたつて、自分が主動的な役割を演じた就学以前のものようではない。

実際に、子供はまわりで起こることにいかに注意を向けずに生活するかを覚える。学校は「いかに自己を現実からずらすか」の長い教程と言うことができよう。だからこんなにも多くの若者たちが、小さいころの世界への覚醒、生き生きとした手応えを求めて、それは覚醒剤によってだけ求められると考えるのかもしれない。

2 教えない学校

そんなに前でなく、私は大学を出たばかり

の若者、あるいは大学生によって作られたす

てきな自由学校を訪れた。ミシガン州、アンダーバーにある「子供コミュニティ」である。(最高級の大学街にあったこの学校は、資金難のためにつぶれてしまった)その年、学校はフレンズ集会所の二部屋——ひとつはかなり小さな部屋、もうひとつは教室ぐらいの大きさの部屋——を使わせてもらっていた。

子供たちは小さな部屋を、静かなこと——読書、お話、考えること、絵、算数、会合、パズル、など——のためにとっておくことを提案し、主張した。そして大きな部屋はさわがしい仕事や遊びのためにとっておかれる。約半数の子供は黒人系で、ほとんどは貧乏、

「不利(幸)な人々」——貧乏な人びとにたらず、必要なものは金だけだ、という言いにくい事実を隠すために使う呼び名——だった。

これらの子供たちはほとんどの時間、いわゆる「進歩的な」学校すらも許す限度以上にさわがしく、はしゃぎ回ってすごした。遊びながら、それらの子供たちは先生や、お互い同志と、大声で興奮して話をしあった。しかも流暢に、表現豊かに。まるで世間で言われている「貧乏な子供は語りがなく、ポツリポツリ、モノシラブルでしか話せない」という

噂を聞いてないみたい。

子供には欲求の順位がある。ある子供にとって、ある時の順位はそれほど決定的なものではない。つまり、子供が第一に欲し、必要とするものが実現できないとき、他にほとんど同じ満足感と喜びを与えてくれる何か他のもの、あるいは他の多くのものがあるかもしれない。しかし、そうでない場合、特に、もしも子供がむずかっているような場合には、その順位は決定的なものかもしれない。

最もしたが、する必要のあることができないうと、他のことに何も手がつかない。邪魔され、止められている。元のスイッチを切る。と全部の電気が切れてしまうようなものである。例の子供コミュニティ、その他の場所で見えたことから考えると、多くの子供たちは予想していたよりもはるかに多く、ことは、身体への激しい動き、そして濃密な他人との接触を求めていることがわかる。

この他人との接触は必ずしもけんかすることを意味しない。しかし、子供が押さえつけられ、ぎりぎりまで苛立ち、腹をたてていて、もう爆発するより仕方ないような教室では、けんかとして出るのが普通である。他にどんな方法があるか知るのには、たぶん子供コミ

ユニティーその他でやっていることを書くのが最良であろう。

子供コミュニティのさわぎ部屋で最も人気があるおもちゃは、数台の中古三輪車だった。その時やっていたゲームは横すべり遊びというのだった。男の子が三輪車の足台に片足をかけ、もう片方の足でけって全速力で走らせ、突然三輪車を横倒しにする。普通、床に黒いタイヤのあとをつけて横転する。

ねらいは、最も勇敢な横転をさせることと、最も長いあとをつけることだった。(これらのあとは、フレンドの人びとが部屋を使う週末までに洗い落とすことになっていた。)

五才に満たないひとりの女の子は九一時間というもの、太い材木にのこをあてていた。その子はへとへとに疲れて、深さ数インチの曲がったみぞを掘った。ただのこを引いて、木材の形を変え、自分の印をその上につけていただけだった。

他の子供たちは「トライ・ウォール」と呼ばれる、強い段ボールでできた大きな箱の中で遊んでいた。外にいる子供が中に押し入ろうとすると、中の子供が入れまいとする。子供たちはそれに夢中になる。

その後ひとりの男の子、あるいは数人の男

の子がもうひとつのやや壁の低いトライ・ウォールの中に入り、壁のすみがちようつがいとめられていたので、ひし形に変形できることを発見した。すぐにとがったひし形を作り、怪物だと言ってそれで床の上を練り歩いた。

当然この怪物は他の子供たちを追いかけ、子供たちは逃げたり、押しもどしたりした。とにかく、子供たちはもっと熱中した。その後、何人かの子供たちは、おにがスカーフで打つために他の子供たちを追いかける遊びをはじめた。

3 ふれあい

子供はみなどんな年令、出身でも、さわつてもらう、掴んでもらう、つづいてもらう、放りなけてもらう、もちあげてもらう、ふり回してもらう、などの欲求が強く、いつもみだされていぬ。あるとき私は「情緒不安定」と銘づたれている、付近の街から来ている白人、黒人の貧乏な男の子たちのためのサマーキャンプに出た。偶然、私はひとりのキャンプ指導者が三人の男の子を、上手に、気を配って指導しながらテーブルコーダーに話を録

4 今の学校をどうする

何をしたら良いか？ たくさんある。いくつかは容易で、すぐに実行できる。いくつかは困難で、時間がかかるかもしれない。むづかしいのからとりあげよう。——学校の義務出席を全廃しよう。

(a) 出席義務の全廃

登校の義務を定めた法律は一時期は人道的で有益な目的として働いた。その法律は子供たちが学校に行つて学ぶ権利を、さもなければ自分の子供を農場、店、鉱山、工場などに送つて金を稼がせるのに使う大人たちの身勝手から守つてやった。今日ではその法律は、学校にも、先生にも、子供にも、誰の役にも立たないものとなっている。

別段学校にいたくない子供らを留めておくのに、学校側は大変な時間と苦勞を払っている。機会あるたびに爆発する、「怒れる小四人」の壊すものの修繕費のことは言わずもがなである。学校になどいたくない子供がひとりでもクラスにいと、その子は自分が勉強しないばかりでなく、他の者の勉強をさまたげるといふことは、先生なら誰でも知っている。

る。

子供を不当に搾取することについては、今日の主な、どころか唯一の搾取者は学校にほかならない。大学にとつつかまつた青年は週に七〇時間を下らないほど、主として論文作製のためにあくせくする。学校に行かない他の多くの子供にとっては学校は、必要な金を稼いだり、自分に有益な仕事をしたり、さらには本当の勉強をする邪魔になる時間の浪費にしかすぎない。

当然反対意見が出る。「もし子供が学校に行かなくてもよくなつたら、みんな街の中でゴロゴロしはじめでしよう。」「いいえ、そんなことはありません。第一にたとえ今の通りの学校であっても、子供たちはきつとある時間は学校ですごすようになる。そこに行けば仲間がいるからである。子供にとっては学校は自然な集会場なのである。」

第二に、学校は今の通りではなくなる。良くなる。すぐに我々は学校のあるべき姿——子供がそこに来なくなるような場所——にしはじめなくてはならないだろうから。

第三に、学校に来たがらなかつたような子供も、我われが頭をしばつて考え、ちよつと手助けしてやると、他にすることがみつかる

音している小さな部屋に足を踏み入れた。

子供たちは恥づかしがりやで、沈黙していたが、指導員は手なれた、洗練されつくした技巧で子供らをからかい、勇気づけ、話させようとしていた。子供らのそばの床の上に座つた私は、何も言わずただ耳を傾けていた。子供たちは私の方を見ようともしなかった。数分後、おどろいたことにひとりの子供がからだの位置をずらせて、一部私の膝によりかかっていた。すぐにもうひとりも位置をずらせて私にふれてきた。どちらも私に話しかけもしなければ、見もしなかった。接触していること以外には私の存在を無視しつづけた。

この沈黙の接触を何分もつづけてから、子供たちははじめて私と視線をかわすようになり、そのあとわざと乱暴に私が誰か訊いてきた。さわるのがまず先にあつた。もしも、ほとんどの先生がするように、そのとき身を引くか、迷つてぐずぐずでもしていたら、それ以上のつながりは生まれなかつたに違いない。

しかし、ほとんどの学校では、子供たちは真の世界、本物、本当の人間と接触できないでいる。

だろう——夏休みや祝祭日に多くの子供がやっているようなことが。

(b) 外の世界と学校

もう少し容易なことをとりあげよう。子供たちを学校の建物から出して、世界についてなまの勉強をする機会を与えよう。若者たちに現に生きているこの世界のことを教えるのに、そこから隔離して壁の中に閉じこめるといふのは、最近のことで、おかしなことである。

子供たちを助けて世界の中に出させ、そこで学ばせることと同時に、学校の中にも現実の息吹をもたらすことができよう。両親の外の大人で、子供らの親しくつきあうのは子供を飯のたねにしている大人たちだけに限られている。大人の生活、大人の仕事があんなものか知らないのも無理はない。我われは学校教師でない多くのひとびとを学校に招き入れ、子供らと交渉を持たせる必要がある。

絵描きや工芸家を学校の住宅に招きはじめたある学校のことを知っている。それらの人びとにこう言うのである。「数週間(あるいは数ヶ月間)我われの学校に来てくれないか。学校を仕事場に役につけてくれ。子供たちに君の

仕事しているところを見させて、子供たちが何か訊く気になって、君に答える気があつたら、いくつかの質問に答えてやってくれ。」

ニューヨーク市では教師と作家の共同のもとに、小説家、詩人、劇作家が学校に来て、作品を読んだり、技法上の問題について、子供たち——多くは貧乏な——に語った。子供たちはむさぼるように飲みこんだ。もうひとつ私の知っている学校では、毎月かそのぐらにおき実際に活躍している街の弁護士を呼んできて法律の話をしてもらっている。

六法全集の解説ではなく、彼の扱う事件、問題、仕事を通して彼の見ること、出合うことである。子供たちはそれが気に入っている。真実であり、大人のことであり、真に迫っている。子供用に矮少化されたニュースでなく、子供雑誌「週刊読物」、「社会科の学習」などではない。嘘でも作り話でもない。

(c) 助けあい

もつとやさしいこと。子供たちを共同で仕事させ、たがいに助け合わせ、他から、または他の間違いから学ばせよう。今では多くの学校でこのころみから、おうおうにして子供は他の子供のもつとも良い教師であることが

わかつていいる。もつと重要なことに、読むことに難のあつた五・六年生が、一年生の勉強の手伝いをはじめると急に読書力のつくことが知られている。

いくつかの学校で、あるところでは実験的におつかなびつくり、あるところでは堂々と「ペアー学習」をはじめている。つまり子供に仲間を組ませ、試験の時であっても一語にやらせ、それによって得た点数なり、結果なりを分け合うというものである。ちょうど大人が実際にやっていることと同じである。うまくいっているらしい。

特殊学級で誰も特別に抜きん出た者のいないクラスの受持教師は、ペアーを作つてやらせると、ひとりづつでやっていたときのどちらよりも各人がはるかに進歩することを報告している。予想できることである。教師にとつてたぶん最もむづかしい問題——誇りと威厳を損なうまいとして、わざと失敗をよそおたぐいの子供に、そのたぐらみをあきらめさせ、もう一度真剣にやりはしめる危険をおかさせる——この問題を導く方法になりうるかもしれない。

い。この世界に意味を与える助けになること、そこで楽しくやっつていく助けになることしかおぼえない。他のことはたとえ習つたにしても忘れてしまう。学校で習得され、一生の間使われるという「知識の蓄積」という考えは、現在の急速に変化しつづつある複雑な世界ではナンセンスである。

とにかくこの時代の、最も重大な疑問や問題はカリキュラム、学校は言うに及ばず、大いからも抜け落ちていいる。どんな大学要覧でも調べて、平和、貧困、人種、環境汚染などに関するいくつかの授業があるか調べてみよう。子供たちは他の何にもまして、そして長年の間違い教育のあとですらも、この世界、自分自身、他人の存在に意味を見出したがっている。子供らにもつとも納得のいく方法で、もし望まれたら我われも手伝つて、子供らへの仕事にからせよう。両親や先生は心配して言う、「でも、たとえば何か根本的なこと、世界を渡つてゆくのに必要な何かを習わなうとしたら……」

(e) 指導要領の廃止

むづかしい変更——固定され、義務づけられた指導要領の廃止、人間は自分にとって興味あること、役に立つことしかおぼえていない。大人は言う、「あとで必要なにかを習

子供自身に自分たちの仕事を評価させよう。言葉をしやべりはじめた子供は、いつも間違いを訂正されて覚えるのではない。あまり直されると話すことを止めてしまう。子供自身が一日に何千回も、自分の話す言葉と、周囲の話すのと較べている。一步一步、子供は修正を加え、他の人々の話しているような言葉に仕上げる。

同じように、子供たちは格別教えられずに歩く、走る、登る、口笛を吹く、自転車に乗る、スケートする、ゲームをする、縄跳びをする、などの動作を覚えてしまう。自分の動作を多少上手なものと較べ、必要な修正を加えながらである。

しかし、学校では決して自分の間違いを探す機会を与えられない。間違いを直すことはなおさらである。我われがすべて子供のためにしてやっつている。まるで、間違いを指摘してやらなければ子供は決して気が付かない、あるいは、強制的に直させられなければ訂正しないとも思っているのではない。子供はすぐに専門家に頼るようになる。自分でやらせよう。もし子供が望めば他の子供と一緒に、問題の答えは何か、果たしてこれは適当な言い方かどうか、こうするのは良いかどうか、

(d) 自己評価

わかないのでは……」何かを習うのは必要になつたときなのだ。将来何が必要かなど誰にもわからない。二〇年後に本当に必要な知識など、今ここにはないかもしれない。

大人は言う、「子供に選ばせたら悪い方をとるに決まっている。勿論極端に悪い選択をすることもあるだろう。しかし、選択したことで実際にやっつてみることを以外に、どうして正しい選択をすることを学べようか。そのうえ、間違ふ機会もなく、間違いをみな他人が直してくれるのだったら、どうやって悪い選択と知り修正できるだろうか。」

最も重要なことに、実際の選択を一度もさせてもらえなかつた子供は、自分が選び、決定することが出来る人間だどうして思っただろうか。もしも、自分の生活を律せないと思つたとき、誰に自分の身を任せようか。これらすべては結局、我々は羊——小心で従順で、追うにも従わせるにも容易である——を育てようというのか、自由人を育てようとしているのか、に帰結する。もし羊を育てるのだったら、今の教育はそのまま完璧である。もし自由な人間だったら、そろそろ大きく変化させた方がよからう。